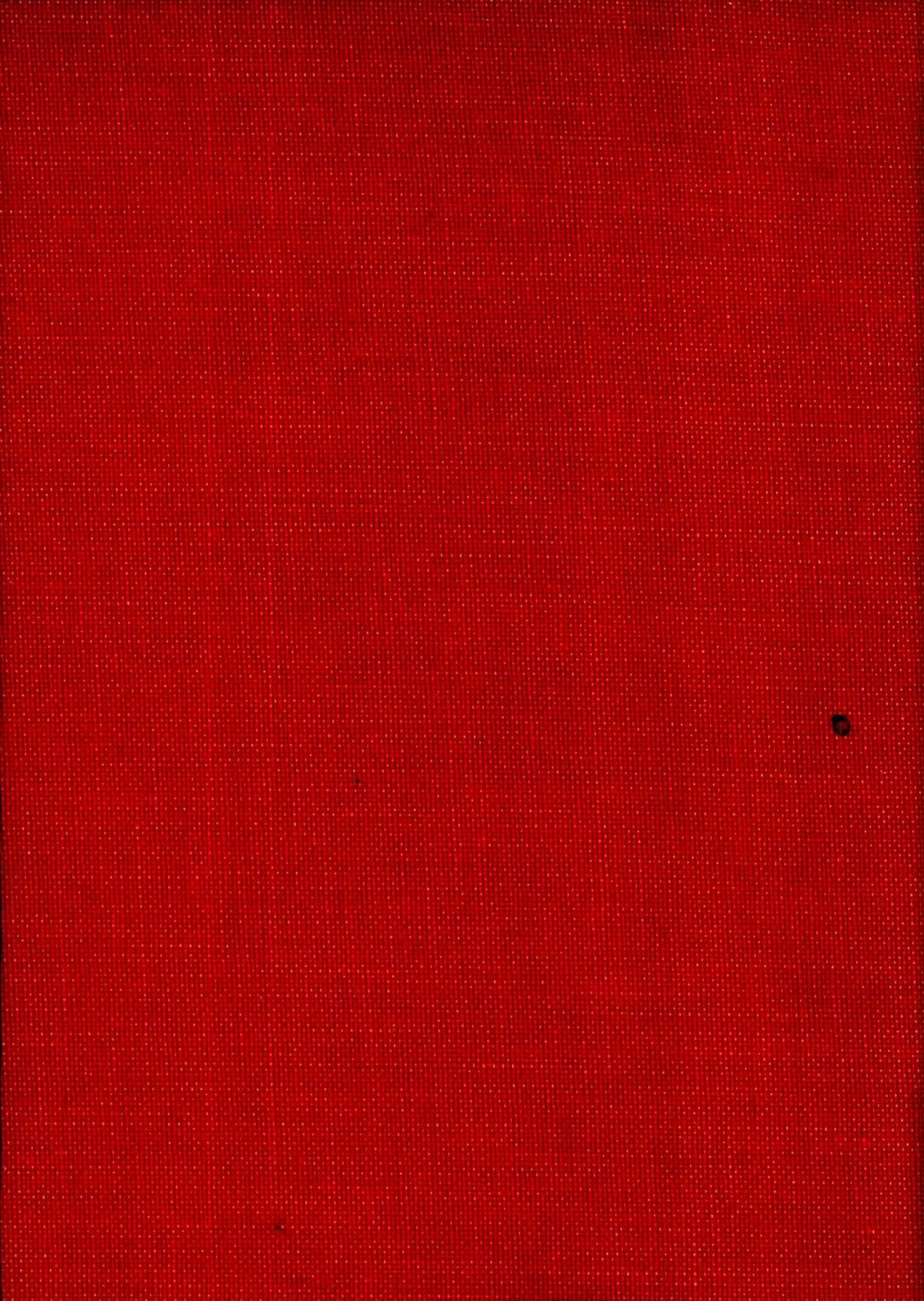




日本古典文学全集

大

鏡

校注・訳
橘

健
二

小学館・刊

大 鏡

日本古典文学全集 20

昭和49年12月20日
昭和51年6月25日

初 版発行
第二版発行

校注・訳者 ^{たちばな}橘 ^{けん}健 二

発 行 者 相 賀 徹 夫
東京都千代田区一ツ橋2-3-1

印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 有 限 公 司
東京都港区三田5-12-1

発 行 所 株 式 有 限 公 司 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋2-3-1
〔郵便番号〕101 〔振替〕東京8-200
〔電話番号〕編集 東京 03-264-8574
製作 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5739

© K. Tatibana 1974
Printed in Japan
(著者検印は省略いたしました)

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合、
おとりかえいたします。

編集委員

秋山 虔

市古 貞次

五味 智英

小山 弘志

神保 五彌

鈴木 一雄

暉峻 康隆

中田 祝夫

題字

手島 右卿

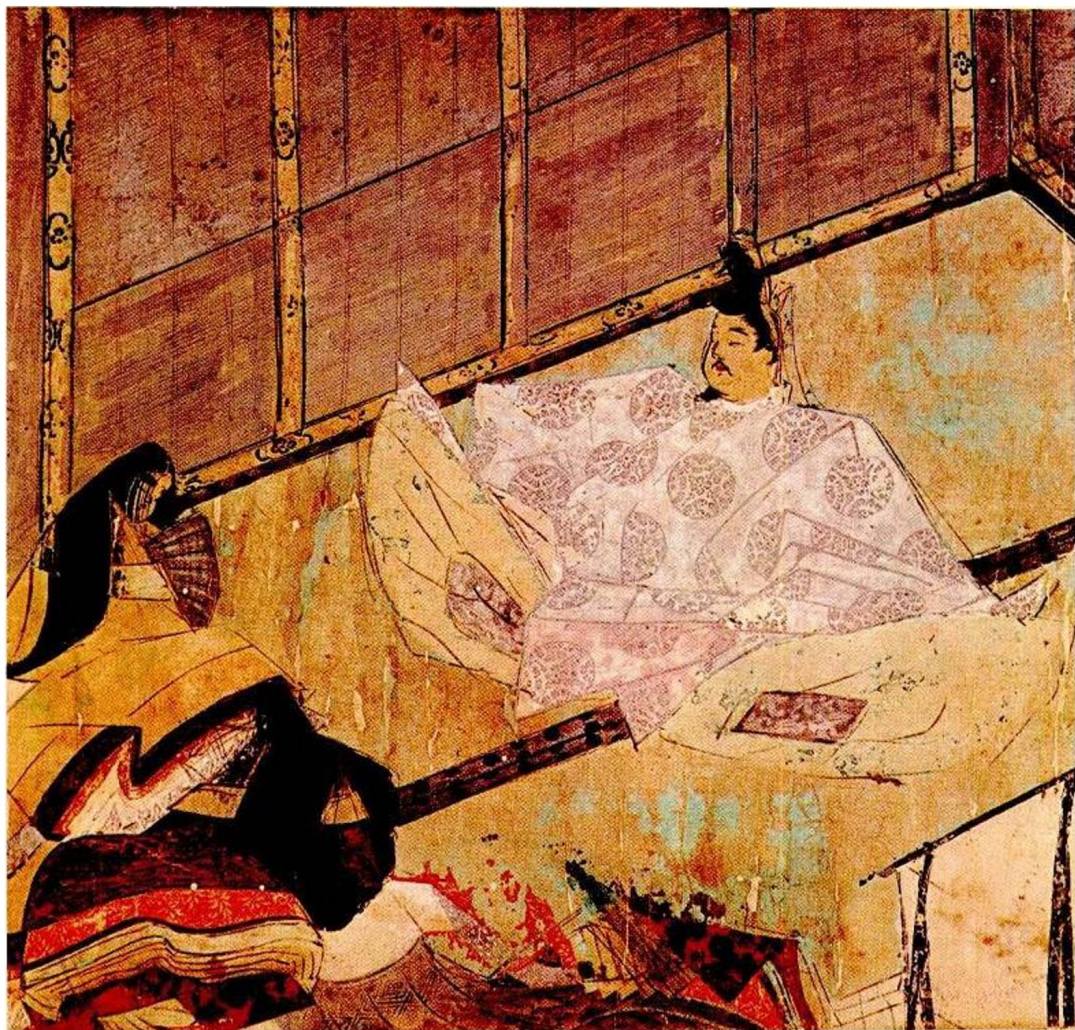






大鏡繪卷／雲林院菩提講図

高松宮家藏



紙本着色。寛弘五(一〇〇八)年十一月一日の夜、一条天皇第二皇子、敦成親王(後一条天皇)の誕生五十日の宴で、酩酊の公卿たちをのがれて、御帳のうしろに隠れた紫式部が、道長に見つけたされて祝いの歌を詠まされている場面。

式部の「いかにいかかぞへやるべき八千歳のあまりひさしき君が御代をば」に対し、道長の即詠の返歌「葦田鶴の齢しあらば君が代の千歳の数もかずへとりてむ」は、率直で人間性にあふれ、満足げな風貌とともに、天真爛漫というべきであろう。



紙本着色。八巻。筆者は不詳。菅原道真をまつて建てた北野天満宮の縁起を描いたもので、その構成は菅原道真伝・菅公怨霊譚・北野社建立・北野社靈験の四部からなる。現存する天神縁起の原本とみなされるところから、根本縁起と呼ばれる。巻末には、昔から北野本宮に伝わった縁起が一度紛失し、文禄五(一五九六)年に堺で発見されたという慶長四(一五九八)年の奥書がある。承久元(一二三九)年という詞書にみえる年代に成立したとする確証はないが、十三世紀前半ごろか。

掲出部分は「大鏡」時平伝にみえる。讒言により筑紫に流罪となった菅原道真が、配所で恩賜の御衣を拝



北野天神縁起絵巻

京都・北野天満宮

している場面である。秋草が美しく咲き乱れ、主人公道真が、配流の身にあつて「恩賜ノ御衣、今此ニ在リ」と余香を拝し、はるかに都をしのぶ姿はかなしくも美しい。



紙本着色。十三世紀末から十四世紀初期ころの筆。

『栄花物語』(駒くらべの行幸)により、万寿元(一二三〇)年九月十九日、後一条天皇や東宮が藤原頼通の邸宅高陽院に行幸啓になり、そのとき行なわれた駒競べの盛儀と、前庭で行なわれた船楽の場面を描いている。

寝殿底の間の正面に天皇が着座、東宮は右手前に座し、公卿たちは簀子に色とりどりの束帯の裾を高欄にかけて列座している。御簾の下からは女房たちの打出の衣がのぞかれ、美しい。前庭の池に龍頭鰐首の船が漕ぎ出てき、妙なる楽がかかるでられている。

絵は緻密な描写で、作り絵式の華麗な彩色がほとんどされており、鎌倉時代様式の大和絵の極致を示すものの、宮廷絵所の絵師高階隆兼が



駒競行幸絵巻

大阪・久保惣太郎氏蔵

筆者と推定されている。久保家と静嘉堂文庫に各一段ずつ分蔵されている。
なお、高陽院は、『大鏡』文中の「基経伝」に見え、『伊尹伝』には、その競馬の日、行成が「いみじき秀句」をはいた話が載せられている。

紙本墨書。藤原道長の日記で、平安時代の公家日記の自筆原本としては最も古く価値は高い。具注暦に書きこまれたもので、掲出部分は、長保六(1034)年二月六日の条の裏書と二月五日の条の裏書の箇所である。二月五日に十三歳の頼通が春日の祭の使いに立ち道長が左衛門督公任に贈った和歌一首「わかなつむかすがのはらにゆきふればこゝろづかひをけふさへぞやる」、公任の返歌は「みをつみておぼつ〔か〕なきはゆきやまぬかすがのはらのわ

〔か〕なゝりけり」。花山法皇御製「われすらにおもひこそやれかすがのゝをちのゆきまをいわでわくらむ」、道長の返歌「二かさ山雪やつむらむとおもふまにそらにこゝろのか(よ)ひけるかな」の四首がしるされている。道長が三十九歳、太政大臣のときである。

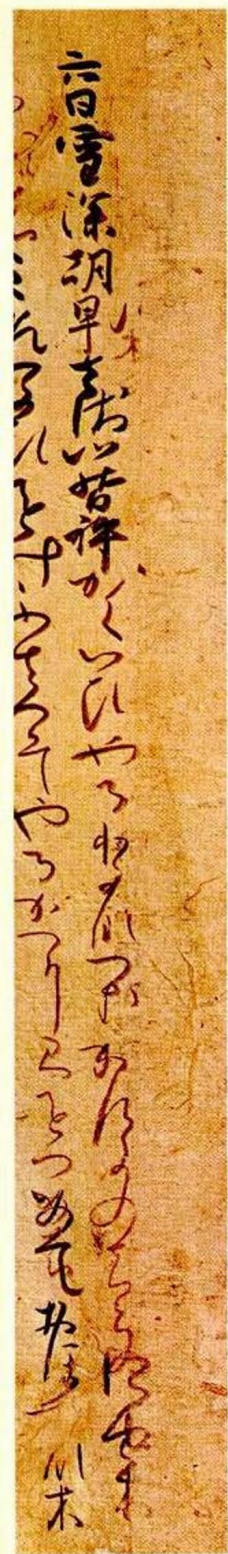
奈良県吉野郡の金峯山(大峰山の別称)頂上の経塚から元禄四(1697)年に出土したと伝える、銅製鍛造鍍金、円筒形の経筒。寛弘四(1017)年八月に、全筒身をめぐって銘文が二十四行五百十一字の長文によって、藤原道長自ら書写した『法華経』その他の経巻十五巻を埋納し、その上に金銅の

燈籠を建てたことをしるしている。『大鏡』道隆伝にも道長が金峯山(御岳)に参詣したことがしるされているが、経塚は、平安時代中期ごろから末法思想により盛んとなったものである。この経筒は紀年銘のあるものでもっとも古くすぐれている。高さ三六・二cm、底径一六・二cm、口厚〇・三cm。

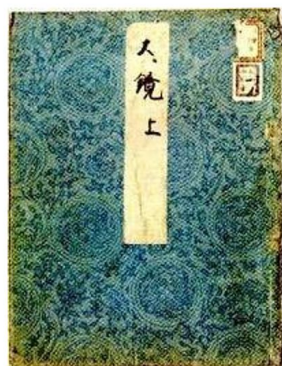


金銅藤原道長経筒

奈良・金峯神社蔵



漳州七出集

[illegible]

平松家旧蔵。古本系三卷本。本書の底本としたもので、「大鏡」冒頭の部分である。襖紙を料紙とする袋綴本。縦二・八・三 cm、横二〇・八 cm で、藍紙の表紙。原題簽「大鏡上」（中・下の二巻、これに準ずる）が表紙中央上部に貼つてある。白紙一葉を置いて、本文墨付第一丁が始まり、墨付は上巻六十四丁、中巻六十九丁、下巻六十九丁。一面十二行、一行約二十四・五字詰め。江戸期初期ごろの書写。上・中二巻は同筆、下巻は別筆と認められる。達筆にして、雅味また掬すべきものがある。古本三巻本の裏書分注のない系統本に属し、「大鏡」伝本のうち、きわめて良質な本文を有する。

目次

解 說	三
凡 例	元

大 鏡 上	三
-------	---

序	三
一五十五代 文德天皇 道康	四
一五十六代 清和天皇 惟仁	四
一五十七代 陽成院 貞明	四
一五十八代 光孝天皇 時康	四
一五十九代 宇多天皇 定省	五
一六十代 醍醐天皇 敦仁	五
一六十一代 朱雀院 寬明	五
一六十二代 村上天皇 成明	五
一六十三代 冷泉院 憲平	五
一六十四代 円融院 守平	六
一六十五代 花山院 師貞	六
一六十六代 一条院 懷仁	六
一六十七代 三条院 居貞	六
一六十八代 後一条院 敦成	七
一左大臣 冬嗣	八
一太政大臣 良房 忠仁公	八
一右大臣 良相	八
一權中納言 從二位左兵衛督 長良	八
一太政大臣 基經 昭宣公	九
一左大臣 時平	九
一左大臣 仲平	九
一太政大臣 忠平 貞信公	九
一太政大臣 実頼 清慎公	一〇
一太政大臣 頼忠 廉義公	一〇
一左大臣 師尹	一〇

大鏡中	一六二
-----	-----

一 右大臣師輔	一六二	一 太政大臣公季 仁義公	一六二
一 太政大臣伊尹 謙徳公	一六六	一 太政大臣兼家	一六八
一 太政大臣兼通 忠義公	一七〇	一 内大臣道隆	一七一
一 太政大臣為光 恒徳公	一七三	一 右大臣道兼	一七九
大鏡下	一八〇		

一 太政大臣道長(上)	一八二	一 太政大臣道長(下)	一八三
藤原氏物語	一八六	雑々物語(昔物語)	一八七
後日物語(二の舞の翁の物語)	一九〇		

校訂付記	一九五
------	-----

付録

系図	二〇〇	人物一覽	二〇〇
年譜	二〇九	地圖	二一六

口絵目次

大鏡絵巻	1	駒鏡行幸絵巻	8
紫式部日記絵巻	5	御堂関白記・金銅藤原道長経筒	10
北野天神縁起絵巻	6	底本	12